

(20)多摩川源流

平成 18 年 1 月に入って早々、法政大学エコ地域デザイン研究所主催の「東京源流展」が都内で開かれた。関東平野を流れる荒川、利根川、多摩川などの大河川の流域は、今日、巨大な都市圏へと変貌してしまっただが、歴史的にその変遷をたどると、5000 年前の縄文海進、さらに 2 万 50000 年前の古東京川にまで遡ることができるという。写真家の鰐山英次氏の自由な眼から見ると、野川の川霧を撮影した多数の写真からは、縄文人の原風景を垣間見ることができるという。ススキが生い茂り、早朝の気温と水の温度差によって生じる野川の川霧を通じて、太古の人々の息遣いを読み込む写真家の想像力には、驚くばかりである。

多摩川源流の山々は、明治時代になって、東京市が水源涵養林として取得した。それ以来、自然林として管理されてきた森もあり、鬱蒼とした美しいブナ林を「東京都内」で見ることができる。東京都民の飲料水は、奥多摩湖を始め、奥多摩の源流を保全することによって守られてきたのであり、また、1653 年に完成した総延長 43 キロに及ぶ玉川上水は、羽村取水堰から都心に上水の供給を可能にした、さらに、多摩川から村山貯水池に導水された水は、利根川水系とも合流し、今日の東京都の貴重な上水となっているのである。大都市の生活は、まさに、保全された自然と歴史によって支えられているのだ。

大都市圏ではほとんどの河川流域が開発され、多数の用水路が消滅してきた。それでも、一筋の水の流れは東京湾に流れ込み、その周辺には、風の道となっている細長い緑地帯を形成し、野鳥や、種々の生物が消息する貴重な場を提供している。気象の変化に伴いその顔を変える寡占は、まさに生きた河川であり、人間にとっても、歴史を思い起こさせ、自然を発見させてくれる貴重な場所なのである。

以上